

能登半島地震 被災地福祉職員派遣 参加記録

期 間：令和6年3月14日（木）～17日（日）

派遣場所：石川県輪島市 社会福祉法人弘和会 多機能事業所一互一笑（福祉避難所）

宿泊場所：施設内

被災地の状況：

- ・令和6年1月1日にマグニチュード7.6の地震が発生。
- ・発生から2カ月半経過しているが通行止めの道路があり、鉄道も全線開通していない。



- ・道路はあちこちに亀裂が入り、溝ができ陥没。電柱や信号機は斜めのまま。

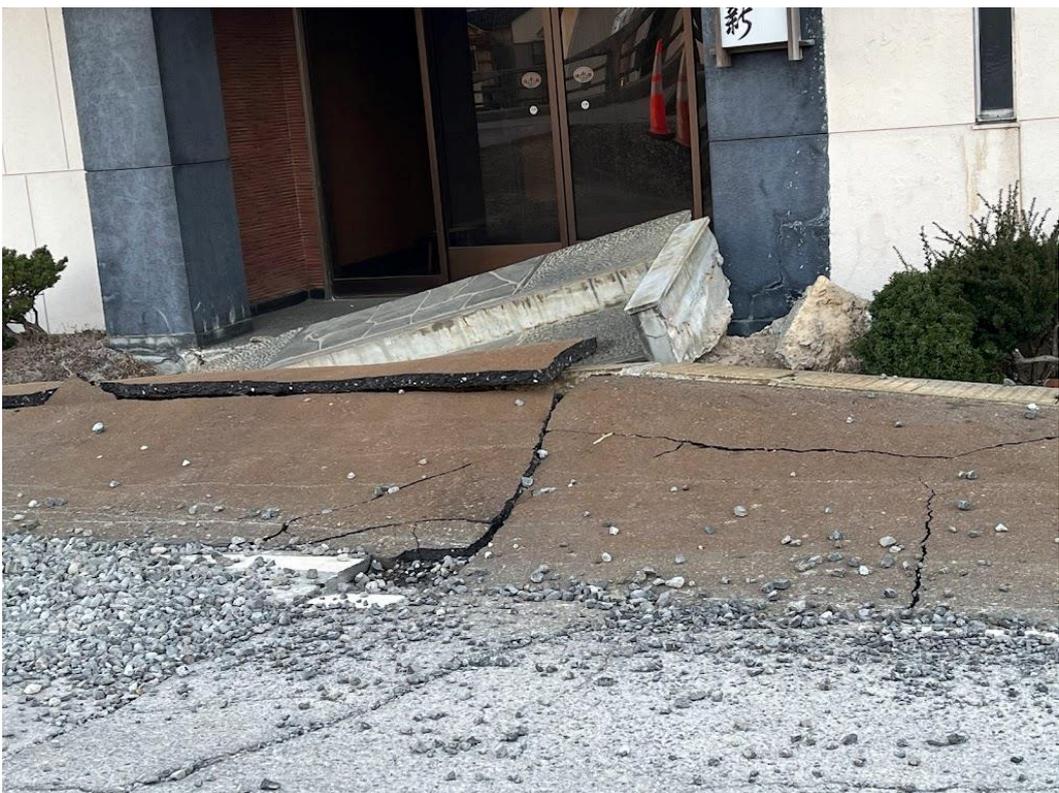
(ただ、初めよりも随分道は良くなり、通れないところも減ったとのこと)

この道を自転車で通ってくる利用者がいた。自宅の水がまだ出ない、と困っていた。

- ・水道管の破損も多く、一互一笑は3日前から水が出るようになったが輪島市内でも出ていないところがある。給水車は避難所前に設置されていたが、利用する人が少なくなると引き上げていくため、水が出ていないところは遠方まで取りに行く必要がある。お風呂は2時間かけて自衛隊のお風呂へ。トイレも袋にパットを入れてすることなどが続いている。



マンホールは高く飛び出している。割れた道路の間に砂利を入れ、通れるよう補修。段差や砂利で歩きにくい。あちこちが隆起して割れた家屋のガラスなども残っており危険。



・崩壊した家や傾いた家はそのままで、傾いた家は余震で少しずつ傾きが大きくなっている。家に入れてもドアや鍵が閉まらず盗難がある。壁に隙間ができています。屋根は瓦が落ち、雨漏りがある。あちこちビニールシートで補修してある。



崩れた瓦は風の強い日は落ちてくるなど危険。
塀は斜めに倒れたり崩れたりしている。



・外は危険が多く、子どもが外出したり、遊んだりできる状態ではない。
学校の校庭は仮設住宅。広い施設は避難所。乳児のミルクなども確保できない状態で子どものいる家族は遠くへ避難しているところが多い。

・同法人のグループホームは入居していた人たちは上記理由から遠方へ避難しており、医療ケアが必要な高齢者の福祉避難所になっている。キャンナス（※1）が主になり運営。看護師、医師が常に在中している。

※1 キャンナスは全国ボランティアナースの会 災害支援チームが能登半島地震で福祉避難所の運営をしている。<https://nurse.jp/archives/2924>

課題に感じられたこと：

■安全、環境

・道路の状態が悪く、また倒壊した家屋や塀、屋根の瓦などがそのまま、近くを通ると危険。体の不自由な方、高齢者、子供は大変危険で住み続けることが困難。車椅子は押せない道路になる。

・電気、水がない。寒い。食事も十分でない。この環境の中で特性やこだわりがある人たちが生活することはとても難しく、避難所での集団生活も厳しい。重度の障害のある人は、遠方の受け入れ先へ避難しているが環境が大きく変わり負担は大きい。

（現地支援者の話）

重度自閉症の利用者の一人は一互一笑に避難してきたが、当初は30人近くが避難してきており、イヤーマフを使用しても声上げや壁を叩いたりすることがある。周囲も余裕が無く「親の育て方が悪い」など心無いことをいわれ「ここにはいられない。仮設住宅も音や声がひびくから居場所がない」と母親は金沢に一軒家を借り子どもと生活している。子どもは環境が変わり、戻りたいというが帰る家はない。

・福祉避難所は、地震直後は近所の方を皆まずは受け入れている。避難してきた方の障がいの有無を把握し環境を整えることは難しい。また、福祉避難所ではあるが、近所の方の受け入れを断ることもできない状態である。

■施設の運営

・施設の職員も当然被災しており25人いた職員も半分は戻ってきていないとのこと。辞めた職員もいる。小さな子どもがいる職員などは戻れず、支援者も少ない状況。住む場所がなく、戻りたくても戻れない職員もいる。利用者呼び戻し支援を再開したくてもまず職員がそろわない。

・事業所で今までやってきていた作業も完全にストップ。市役所の施設外のトイレ掃除は行けるようになった。戻りたい利用者もいるためなんとかやっていきたいが、元に戻るのか不安。生活介護の利用者は1人しか残っておらずあとは遠方にいる。

・職員自身も被災している中で、なんとか利用者や避難者を支えている。職員のメンタルサポートも必要。

- ・土砂災害危険区域で運営出来ないなどもある。土砂災害危険区域で運営出来ないなどもある。警報がなると言われたが特に夜勤など考えると逃げられるか分からないため運営再開できない。

■児童

- ・危険が多く、生活するのが難しい。
- ・学校はオンラインで対応などしているところもあるが、転校を検討している家庭もある。エッセンシャルワーカーの家庭は子供が残っているところがあるが、父親のみ残り母子は避難などのケースも多い。地域の子どもが戻って来ないのではないかと不安がある。

■高齢者

- ・高齢の方は家が被災しても、今更家も立てられない、と話す人が多い。避難所もきつい。なんとか入れる家（赤紙）がある人は、危険な家に住み続ける人が多い。
- ・福祉避難所にいる人は仮設住宅が当たるのを待っている状態。
- ・避難所での生活は運動不足と栄養不足。設備の整っていない避難所での入浴支援の難しさ。

■災害に対する意識

- ・まさか自分たちの所がこんな事になるとは思っていなかった。備蓄などの準備もできていなかった。とのこと。（現状自分も同じ状態）
- ・すぐに困るのはトイレと水。トイレは初めはバケツにためた水で流していたが、下水もズレたり割れたりして詰まってしまう、逆流。途中から流してはいけないという指示になった。ビニールにオムツパット入れて捨てるなどが続いていた。
- ・電気がなく寒くなる。カセットコンロや暖が取れるものがある。充電ができずに携帯電話は数日使えない。
- ・物資はすぐに届かない。数日分は確保しておく必要がある。
- ・家は1階が潰れている。机の下で助かった人もいた。また、外出中、揺れたので近くの塀に捕まったら指がめり込んでいった利用者がいた。震災時の訓練、逃げ方を各事業所で伝える必要がある。避難訓練が重要。
- ・今後の見通しが立たない避難所生活で、2、3ヶ月くらいで行き場を考えることになる。

個人的な見解：

- ・今回実際に被災地を見たことで、災害が起こった時に何が難しくなるのかがイメージしやすくなった。人口や建物の作りの違いから、福岡市で大きな地震が発生した場合には、また違う問題が発生するのではないかと考える。そのため、同じような対策だけでは難しいこともあると思われるが、私たち相談員が障がい者の方や施設と広く繋がりがある仕事であることを考えると、災害時の対策等に役に立てることがあるように感じた。

そのため、今回の報告を事業所内で行い、私たちが出来る取組等を検討した。

すぐに取り組める内容：

- ① 実際に災害が身近に起こっていないのでイメージがしにくく人ごとになってしまうところがある。ニュースなどをきっかけにして利用者に伝えていく。
- ② 利用者それぞれの緊急時の避難場所をモニタリング等で一緒に確認しておく。また必要に応じて実際に行ってみる。支援者も把握しておくことで、その後の確認がしやすくなることも考えられる。
- ③ 実際に身体障害の方から避難計画書を作成している。水害や地震など災害ごとにどこに避難したら良いかを伝え利用者と確認する。（地震の時は〇〇、水害の時は自宅など）また、地震の際にはエレベーターが動かなくなる。避難の仕方も確認する。
- ④ 利用者と一緒に大事なものを確認し、保管場所を明確にしておく。その際に年金証書や普段使っていないものがあるかどうかを合わせて確認しておく。万が一、持って逃げられなくても場所がわかれば後で探せる可能性が高いのではないかな。
- ⑤ 事業所も倒壊したり、火災が起きたりする可能性がある。被災した直後はパソコンや携帯も使えなくなることが想定されるが、大切なデータはクラウドで保管しておくことで守ることができる。
- ⑥ 日ごろから地域の人に障がいのある人を知ってもらえるようにする。避難した時にそばにいるのは地域の人たちであることが想定される。その時に少しでも理解のある人がいることで障害を持った方々も安心して避難所で過ごすことができるのではないかな。

関係機関や行政と取り組みたいこと：

- ① 避難場所に地域の人でも障害を持っている人も一気に来ると問題が起こりやすい。一時避難所としてある程度わけて逃げられたらいい。（確認できる避難場所が分かっている）
- ② 事業所の横のつながり、ネットワークを強くしていく。福岡市は様々な事業所が点在している。災害時の協力体制を整えておくことで近くの事業所と状況をみながら支援者同士で助け合いができるのではないかな。障がい特性のある人たちが二次避難所として自宅から近い福祉施設内で安心して過ごすことができれば、遠方に避難しなくても暮らせる人たちがでてくるのではないかな。BASE 会議に提案したり、積極的に会議等に参加したりすることでこの取り組みや関係性の構築を促進することができる。
- ③ キャンパスの障がい者版を作る。被災した場所に、登録した支援者がそれぞれのサービスに合わせて支援に行ければ大変心強いのではないかな。

地域とのつながりや、福祉サービス同士でのつながりを強くすることが、災害での備えになっていくと感じた。普段から地域や事業所同士のつながりを作っていけるようにしたい。